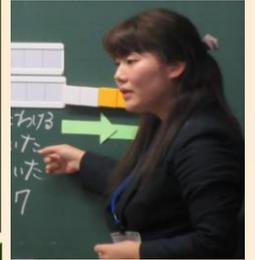




第1学年「ひきざん」横島 睦 教諭

既習の引き算（ $17-5$ ）では、ばらから取ることができるとは、本時の $12-5$ ではばらから取ることができない。「どこからとればいいのか」と問い、5個取るブロック操作の違いから減減法と減加法の2つの計算方法があることに気付かせる。ブロック操作での10の束をくずすタイミング、式、言葉の説明などを比較し、二つの方法の共通点から、繰り下がりのある引き算は10のまとまりをくずせば引くことができるという一般化につなげたいという提案がされた。



本時で「くり下がりのある引き算は10のまとまりをくずすことでできる引き算」という一般化につなげるために、減加法と減減法の二つを扱う授業展開や板書での可視化が効果的であったか話し合われた。二つの計算方法を具体物やブロックで表し、また、式や言葉で板書したことをもとに共通点や相違点に気付かせる展開だったが、出された意見が全体のものになっていなかったことが課題としてあげられた。改善策としては、友だちの説明に合わせて一人ひとりの児童にブロック操作を十分に行わせることで、考え方の違いを全員で共有していくことが可能になるだろうという意見がだされた。



文部科学省初等中等教育局教育課程課 笠井健一調査官より

1時間の授業で、子どもが何ができるようになったのかが大事である。本時のゴールを児童の具体的な姿でイメージするとともにねらいが達成したかどうかをどのように見取るかということを確認しておくことが大切である。

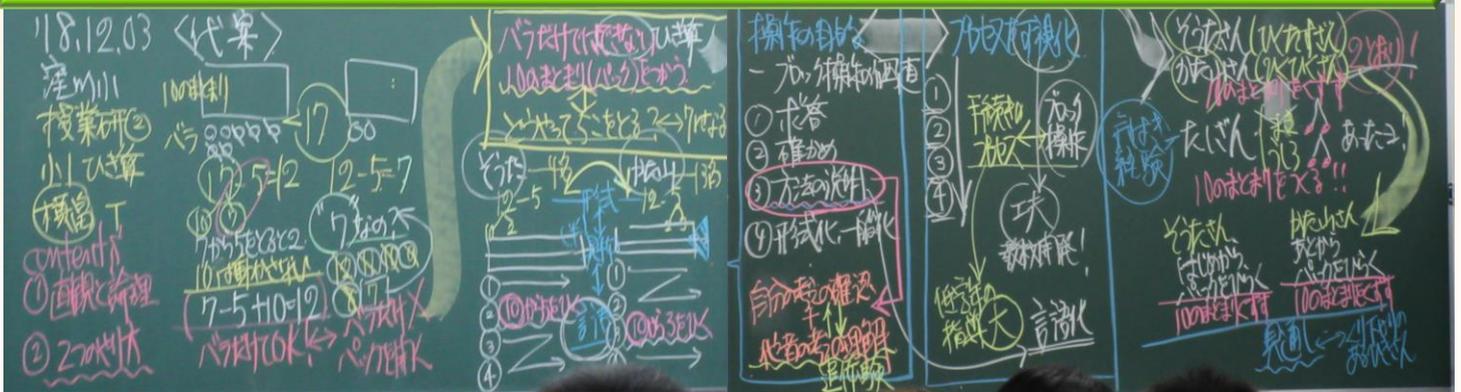
よかった点

- 既習の $17-5$ から考えることによって、本時の $12-5$ では「ばらの2から5が引けない時に、どこから引いたらいいか」というめあてが自然にでてきた展開となったこと。
- 3口の計算の式を示したことで、ひくたす（減加）法とひくひく（減減）法の違いに子どもたち自身がはっきりと気付くことができたこと。

改善点

- 本時のねらいに向けてブロック操作をしながら計算の仕方について説明する活動を多く取り入れること。
- ペアで対話することのねらいを明確にすること。（自分の考えをはっきりさせるためのペア活動なのか、新しい考えを知るためのペア活動なのかなど。）

齊藤一弥学力向上総括専門官による指導板書



齊藤一弥学力向上総括専門官より

子どもの直観的なつづやきを生かして、これまで（ $17-5$ ）は、10の束を動かさなかった勉強だが、本時（ $12-5$ ）は10の束を動かさないといけない勉強だという既習との違いを明確にし、思考の対象をはっきりさせること。答えが7になる説明をすることが本時の授業のねらいであり、減加法・減減法の二つの計算の仕方の違いに気付かせるためには、それぞれの手順を意図的に子どもたちに追体験させることが重要。さらに、ブロックを操作した過程を可視化することで、操作したことを言語化していくことが低学年指導での重要なポイントである。

授業者より

板書にとらわれすぎず、目の前の子どもたちの気付きを活かし子どもたちと共に授業をつくり上げていくことと、何を学ばせるかを明確にもつことを今後の実践で大切にしていきたい。

参会者の声

児童の実態に応じた算数教育について学ぶことができた。中学1年の正負の数での指導に活かせる内容であると感じた。今後の指導に生かしていきたい。

【窪川中学校 野川友志 教諭】

